近畿大学医学会奨励賞受賞論文抄録

Conservative treatment of retained placenta in six patients: a retrospective case series Analysis of conservative medical treatment against retained placenta was possible in six cases

胎盤遺残に対して待機的管理が可能であった６例の解析

藤 島 理 沙
産科婦人科

分娩後の胎盤遺残は，産褥期の出血・子宮内感染の原因となる疾患であり，癒着胎盤を合併している可能性もある．産科危機的出血のために大量輸血や集中治療，子宮全摘を要する症例がある一方で，近年では待機的管理が可能であった症例も多く報告されている．今回我々は当院で待機的管理を施行した胎盤遺残の６症例について後方視的に検討し，その臨床経過および妊娠反応（血清ヒト絨毛性ゴナドトロピン；S-hCG）の推移に関して比較検討した．６例中３例が再出血をきたし，止血処置を要したが，３例は遺残組織の自然排出に至った．止血処置を要した３例でも止血後は待機的に管理が可能であり６例全例で子宮の温存が可能であった．また，S-hCGが低下傾向であっても陰転化するまでは積極的な摘出により再出血をきたすリスクが有ることがわかった．今後さらなる症例の蓄積により解析が進み，臨床経過により大きな影響を与える因子が明らかになることが望まれる．